

情報の有機的連関による社会的支援の可能性：コミュニケーション・ツールとしてのアーカイブ

The Utility of Narrative Archives as Social Support

福田茉莉（立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員）

滑田明暢（立命館大学立命館グローバルイノベーション研究機構 専門研究員）

山田早紀（立命館大学大学院文学研究科 博士課程後期課程 /
日本学術振興会 特別研究員）

本プロジェクトの目的は、社会的孤立が生じやすい状況下において、情報の有機的連関およびコミュニケーションによる社会的支援の可能性を検討することであった。とりわけ、生きづらさや社会的困難を抱える人たちが社会的に孤立してしまう状況に対するナラティブ・アーカイブの支援の可能性を議論した。

研究 1. デジタル・アーカイブの実用性

本研究では、供述調書を調査対象とし、供述内容を可視化するためにカチナキューブを用いて、ナラティブ・アーカイブを作成した。その後、供述内容を可視化がもたらすコミュニケーションを検討した。

調査 2. ウェブ・アーカイブの応用可能性

本研究では、インターネット上に存在する掲示板や情報サービスに焦点を当て、そのサイト上でどのようなコミュニケーションが実施されているのかを分析した。とりわけ社会的に孤立しがちな状況下にある難病患者や育児に関する事例を取り上げた。

各事例から、法や医療、文化などの場面におけるナラティブ・アーカイブは、情報の有機的連関をうみだすひとつの記号として機能していることが明らかになった。

（2013 年度 人間科学研究所萌芽的プロジェクト採択「情報の有機的連関による社会的支援の可能性：コミュニケーション・ツールとしてのアーカイブ」）